

老舍『趙子曰』試論

渡 辺 武 秀*

On Lao Shê (老舍)'s "Chao Tzŭ yüeh (趙子曰)"

Takehide WATANABE

概 論

老舍用“幽默”の筆写出了趙子曰の性格。老舍讓我們覺得趙子曰似乎是“好人”，他自己並不知道他做的事是好还是坏，也不覺悟自己做的事意味着什么，不了解他的行為會給別人與社會帶來了什么影响。趙子曰好象是在做着夢似的，又好象是痛痛快快地跳着舞似的。作者告訴人們，有时，“好人”可能比坏人还危險，他們存在社會里面，沒暴露出来，从内部瓦解社會，阻碍社會的發展。但是，难道我們也要作一个跟趙子曰一樣的人嗎？老舍的“幽默”筆法讓我們知道了这种恐怖。

序

茅盾は『趙子曰』に対する出版当時の印象を次のように述べている^(註1)。

『趙子曰』は私に深い印象を与えた。その当時、文壇にちょうど暴風雨のような新運動が巻き起こっていたし、その当時、熱烈な闘争生活の中から体験してきた作家達の筆による人物と『趙子曰』とは少なからず距離があった。言わば、その当時私自身もちょうど小市民知識分子に材を取り創作を始めていた、だが、『趙子曰』の作者が生活に対して取る觀察の角度に対して、私自身の考えも尽く同じにすることは出来ない。しかし、いずれにしろ、『趙子曰』は私に深い印象を与えた。老舍先生の喜び笑い怒り罵る筆墨の背後に、私は彼の生活に対する態度の厳格さ、彼の正義感と暖かい心、祖国に対する誠実な愛と熱望を感じた。

老舍は1924年夏、ロンドン大学東方学院の中国語教師として英国に渡る。以後、その地で、『老

張の哲学』(1926)をものにし文壇に登場した。そして更に『趙子曰』(1927)『二馬』(1929)を続けて『小説月報』誌上に発表し^(註2)、文壇での地位を不動のものにした。茅盾が前述のような印象をもった『趙子曰』は老舍の第二作目ということになる。

この『趙子曰』という作品は、当時、多くの読者を持っていたし^(註3)、又発表順の上からも老舍の作品において極めて重要な位置を占める。にもかかわらず、最近の評価は決して良くない。次の文章は1984年の文学史の一節である^(註4)。

ある時には、欺き圧迫する者の悪行と、被害者の不幸の中から笑いの材料を捜し出し、前者に対する憤慨と、後者に対する同情を笑い声によって薄めてしまい、果ては消し去ってしまう。風刺は力をなくし、ユーモアは狡猾に近く、作品の思想意義に影響を与え、芸術表現において、ある時には、不確実さやくどさに流れるのを免れない。これらの弱点は材料を大学生の生活に取る『趙子曰』に顕著に現れている。

平成元年10月31日受理

* 一般教育部講師

周知のように、老舍の作品はしばしば「ユー

モア作品」と呼ばれることがあるが、文学史の作者は「ユーモア」を否定的に見、かつその「ユーモア」の欠点を最も多くもつものが『趙子曰』だとする。

文学史の評価は、裏を返せば、老舎の作品の中での「ユーモア作品」の代表が『趙子曰』であると述べている、と取ることも出来る。では、ここで言及されている「ユーモア」とは一体どういうものか。もちろん文学史の中にこの回答を見いだすことは出来ないし、従来のどの老舎研究家も具体的な回答を与えているようには思えない。確かに、これに回答を与えることは簡単でない。だが、筆者には「ユーモア」という言葉で表されている部分にこそ、老舎文学の本質に抵触するものがあるように思える。そこで、筆者は、何が老舎の「ユーモア」かには答えられなくとも、作品を徹底的に分析し、作品全体のストーリーの展開のどの部分にユーモラスな表現があり、それがストーリーの展開でどのような効果を上げているかを考えることによって、「ユーモア」という言葉で象徴的に表現される老舎文学の特徴には触れられるのではないか、と考えた。

この考えで行ったのが「老舎『老張の哲学』私論」の「幽默（ユーモア）」^(註5)の項である。そこでいささか老舎文学の本質のようなものを言うことが出来たように思う。そこで、今回更に、この小論で、最も「ユーモア」的と考えられる『趙子曰』を取り上げ、老舎がこの作品で行った試み、「ユーモア」という言葉で称される老舎文学の本質を考えてみたい。

この考察によって、冒頭に挙げた、矛盾が「深い印象を与えられた」理由の解明や、作品の「笑い」を意味のないものとする評価にいささか反論を加えることが出来るのではないか。さらに、この考察を通じて、老舎文学の出発になったものがわずかなりとも明らかに出来れば幸いである。

作品ではまず、後まで問題にされる欧陽と趙子曰との関係、李景純と趙子曰との関係が冒頭の部分で明らかにされている。

欧陽と趙子曰との関係を、作者は次のように述べる。

彼（欧陽）の容貌、服装は趙子曰に比べると、その美しさたるや十倍にとどまらない。だが彼ら二人は形と影のようにいつも離れない親友だ。……（略）……麻雀の席で、彼らの関係はますます密接になる。趙子曰がもし麻雀に負けて金を欧陽天風に取られたら、彼は麻雀をするのが最も高尚な遊びであると思う以外に、彼は無形の一種の慈善事業をしたかのように感じるのである。（第二・2）

一方、李景純と趙子曰との仲は、次のように述べられている。

趙子曰は李景純に対して、どうしてかわからないが、いつもいささか恐れる様子がある。さらに不思議なのは、李景純に会わないと勉強のことを思い出さないのに、李景純にちょっと会っただけでたちどころに書物をこっそり引き出す。（第三・2）

この引用から、既に、遊び↔学問、弛緩↔緊張、軟↔硬といった欧陽と李景純にたいする、作者の描き分けが読み取れる。更に、この李景純が趙子曰に忠告する形で、欧陽と対照的な立場にいることを暗示する発言をする。

もちろん君自身もその咎を逃れることはできない。でも外からの誘惑、その力だって小さくはない。友だち付き合いで言えば、君にいったい何人の真の友達がいる？ 君の、あの唯一の親友にしても、おおそ彼が誰だかわかるだろうが、彼は君の友だちかい、それ

とも敵かい？

（第三・2）

この引用文のあと、李景純の言葉を受けて趙子曰は「欧……」と言いかけるが、李景純はその言葉をさえぎる。李景純が欧陽のことを「彼」として実名を言わないのは、欧陽が「李瘦猴（李のやせ猿）」（第三・3）と名指して敵意をむき出すことと対照的であり、二人の性格の違いを窺わせる。

そして更に、李景純は趙子曰に三つの提言をする。第一は、一つの学問分野を選んで四、五年死に物狂いで勉強する。第二は趙子曰の故郷には家の土地があるのだから、農学の書籍と新式の農機具を買い、家に帰り一方では勉強し一方では実験する。第三は、ちゃんとした学問がないと危険ではあるが、良い経験であれ悪い経験であれ、経験は大事だから経験を積む為にも社会でやる仕事を探す。（第三・2）李景純は、欧陽とは拘わらず、三つのうちどれかを選択し、実行するように勧める。

このことから既に解るように、まず最初に、暗示的ではあるが、李景純を「是」とし、欧陽を「非」とする構図を作り上げていると考えられる^{（注6）}。

そして、二人の間に、他の登場人物を作品で果たす役割に応じて配している。比喩的に言えば、一方の極に李景純という人物が配され、それと対照的な極に欧陽天風という人物が配されており、その極の間に電子のごとき状態で、趙子曰を初めとする登場人物がいる、と考えることができる。作品での、李景純と欧陽との登場回数は決して多くない。だが、最初に示された李景純の「是」と、欧陽の「非」は、作品全体を通じて、登場人物たちの言動、行動を規定していくことになる。

例えば、李景純や欧陽の二つの極の間に在って、この作品で重要な脇役である武端と莫大年とも役割に応じて、巧妙に対照的に描き分けられている。比較的早い時期に欧陽の「非」を見抜き、彼と決別する莫大年と、人の「秘密」を

探ることに自信をもち、「秘密」の持つ魅力から、「秘密」に関わりを持つ欧陽と行動を共にする武端とは、はっきりタイプが違う。

このようにして『趙子曰』は舞台は作り上げられている。李景純の方に趙子曰がつけば、読者は安心し、欧陽天風の方につけば読者は失望落胆するという、あくまで暗示的ではあるが、言わば勧善懲悪小説にしばしば見られるハッピーエンドの構造が準備されるのである。

したがってこの作品は、趙子曰という人物がいつ、どのようにして欧陽と決別し、李景純の方へ行くかというのが作品の眼目であり、この転機に関わってくるのが王霊石という女性である。

作品の構造は、意外に容易に見いだせる。だが、ストーリーの展開は決して単純ではなく、屈折に富む。ここに関わるのが「ユーモア」ではないか。

「是」だから「是」に従い、「非」だから「非」から離れ、「非」を打倒すべきである。これは正しい論である。しかし、人間はこう簡単に割り切れるような精神構造はしていないのではないか。「非」にも不思議な魅力があり、つい「非」に従うことも有り得る。また、頭では正しい論とわかっていても、相手の言い方、或は言い出すタイミング、その場の雰囲気により、その論を受け入れない状況も起こり得る。確かにこの態度は正しくない。しかしながら、このような状況がないとは必ずしも言い切れない。これも人間の複雑な一面である。このような人間の微妙かつ複雑なところを醸し出すのが「ユーモア」と言われるものであるように思える。

次に節を改めて、欧陽と李景純との二つの極の間に、趙子曰が王女史をめぐるどのような行動を取っているのか、ストーリーの展開を追いながら、子細に検討して行く。

二

この小説には存在は暗示するが、最後までス

ポットライトを浴びて表舞台上に上って来ない女性、王霊石が描かれている^(註7)。この作品における王女史は、趙子曰が思いを寄せる対象であると同時に、正体不明の人物として描かれている。つまり謎の人物なのである。それ故、王女史はどんな人物なのか、彼女を取り巻く人間関係がどのようなか、最後まで解らない。

この謎に拘わって来るのが、この作品に氾濫する「秘密」という言葉である^(註8)。そして、この「秘密」に最も関係している登場人物が「あだ名は武秘密である」(第三・3)と言われている武端である。

彼の作品での役割は次の言葉に現われている。「僕は秘密を知らせるほうだ。秘密を利用するより簡単だからさ。君どう思う? 欧陽天風は秘密を利用するに近いけれど、彼の聡明さは我々とたいして変わらないのじゃないかな!」(第四・4)

従って、「秘密」に余り関心を持ち過ぎ、次のようなことも起こり得る。

「武くん、食事にどうだい、君とちょっと相談したいことがあるんだ!」

「何だい?」武端は尋ねた。

「秘密!」

秘密という言葉を知ると、武端はモルヒネの注射でも打たれたかのように、帽子をつかんで趙子曰について行った。大慌てで服を着替えることも忘れていた。(第十二・3)

つまり要約すれば、この作品には、「秘密」を巡って、「秘密」に異常な興味を示し、それを得るために奔走する人物、それを利用する人物、王女史を強く恋するあまり「秘密」という名で送られてくる王女史に関する情報によって、滑稽な失敗を繰り返す趙小曰等の人物がコミカルに描かれている、といえよう。以下、王女史(「秘密」)を巡ってストーリーがどのように展開しているのか、いくつかの場面を取り上げてみていきたい。

○校長排斥運動

前に少し触れたように趙子曰は李景純の忠告によって、いったんは校長排斥運動に参加したいと決心する。だが、欧陽と武端に強引に料理屋に誘われ酒を飲まされ、次のような衝撃的な話を聞かされる。

ちなみに、「第一節」で既に述べたようにこの作品では初めに、やや暗示的ではあるが李景純を「是」、欧陽を「非」とする枠組みが提示されており、この場面は趙子曰が李景純に付くか、欧陽に付くかの重要な選択を迫られるところである。

「李くんは本当にいい奴だ。私に助言をしてくれた。故郷に帰って田畑を耕やせて。本当にいい奴だよ。」

「全く良い考えだぜ。」武端は言った、「どう思う、君がかえれば、彼はまんまと王女史のものに出来るってわけだ。ハハハハハ。」

「李の痩せ猿め、とんだわるだくみをめぐらすもんだぜ。」欧陽は笑って言った。

(第三・3)

この場面には趙子曰が最終的にどういう決断を下したか書かれていない。だが、この言葉によって趙子曰の行動方向に修正が加わったことは想像がつく。なぜなら、趙子曰は王女史に思いを寄せている、李景純の忠告が、彼が王女史を自分のものにするための方便であったとすれば、当然ながら、趙子曰は李景純の忠告を入れず、欧陽たちの提唱する「校長排斥運動」に参加することになってしまうからである。

やがて、趙子曰は、「校長排斥運動」で負傷して病院に入院することになる。そこに李景純が見舞いにやって来る。その際、趙子曰は欧陽も「校長排斥運動」で怪我をしたのではないかと心配して、李景純に欧陽のことを尋ねる。そこで、欧陽がその運動に参加していなかった事実が伝えられる。

さらに、そのあと、趙子曰は王女史のことを

聞きたくてたまらないのだが、実際のところどうも言い出しにくいという態度の末に、口ごもりながら尋ねる。

「聞きたいのだ。教えてくれないか。」

「なんのことだい？」

「おしえてくれよ！……王女史はどんなふうだい？」
（第四・1）

趙子曰は滑稽で哀れなほど純情に王女史に「思い」を寄せている。李景純も趙子曰の「思い」がわかるからなお返答に困る。まして趙子曰を失望させることであるとしたらまたなおさらである。李景純の胸中を作者は次のように書く。「しゃべらなければ彼にすまない気がする。口にすれば彼をますます苦しみ悩ますことになるかもしれない」（第四・2）。それ故、李景純は結局、曖昧に言葉を濁してしまう。彼のこの思いやりが、王女史を断念する機会を失わせるばかりか、却って趙子曰の怨みさえを買うことになる。恋心はかくも複雑な面を持つ。

○校長復職運動

校長排斥運動で負傷した傷も癒え、アパートに帰って来た趙子曰は武端と欧陽にバッタリと出会う。そこで、伝えたい「秘密」があると言う武端や欧陽と一緒に、趙子曰は料理屋に行く。料理屋で話す武端の言葉の中で意外な事実が読者の前に提示される。

武端は低い声で言った、「王女史はすでに張教授に写真を渡したぜ。」
（第六・1）

写真を渡すのは相当に親密な仲であり、最初に匂わせてあった李景純との仲を一変させる。では李景純と王女史との仲はどうなったのか、作者は一切書かず、読者の想像に委ねる。つまり、作者は作品の世界の背後にもうひとつ物語があることを暗示し、それを読者に想像させる描き方をしているのである。

武端の言葉に待ってましたとばかり、欧陽は趙子曰の王女史への「思い」を利用する。欧陽は一旦趙子曰を「校長排斥」運動に担ぎ出しておきながら、今度は、全く逆の「校長復職」運動に趙子曰を引っ張り出そうとする。なかなか首を縦に振らない趙子曰に言う。

「いいかい、校長を応援することは、つまり張教授を打倒することなのだ。張教授を打倒するってことは、つまり王女史を奪い返すことになるのだ。今、我々は王女史が張教授に与えた写真を盗み出す手だてを考えようじゃないか」欧陽は話ながら、武端をチラッと見た。「盗み出し、全体学生会議を開いた時に、聴衆に彼らの秘密を暴露するのさ。こうすれば、張を擁護する学生は即刻裏切らねばなるまい？ そう！ 必ずそうなる！ 同時に、校長を擁護する者たちはおのずと勢力を増すことになるだろう。この後、我々は新聞に張教授のスキャンダルを載せて、彼の名譽を踏みにじるのさ。そうすれば二度と教育界では飯を食えなくなる。……（略）……趙くん、君は、ハハハハハ、おめでとう！ 王女史は趙夫人ということだ。」
（第六・1）

このような論理に押し切られ、趙子曰は欧陽の提案を受け入れて、「やろう！」と叫ぶ。

ここでも前の場面と同様、武端が王女史に関する情報を送り、その情報を欧陽が利用するという構図が現れる。

これまでで既に解るように、趙子曰が王女史を強く慕えば慕うほど、欧陽の良からぬ企てを助けることになってしまう。言わば王女史は欧陽が趙子曰を悪事に引き込む餌である。従って、趙子曰が王女史への「思い」を断ち切ることが、彼の再生への道なのである。

○女権発展会成立大会

次の場面は「女権発展会」の成立大会である。この会の発起人の一人である欧陽が趙子曰や武

端をこの会に招待する。この会場で趙子曰の方にやってきた欧陽は、次のように言う。

「君は演台の下の第一列目の椅子に座り、帽子を隣に置いて、席をひとつ取っておきなさい。すぐ王女史がやって来る、そしたら、彼女を君のところに連れて行くよ！」と言い、「武くん！」欧陽はただちに武端を呼んだ。武端は急いで秘密を聞こうとして、笑い顔を近づけた。(傍点は筆者) (第十三・1)

この場面で注意すべきは、欧陽→武端といった情報伝達の様子を描き出し、これ以前もまず欧陽→武端と情報が流れ、その情報が武端→趙子曰と流れるという構図が暗示されていると思われる点である。事実、この場面以後、作者は王女史に関する情報を武端を通して伝える方法を取らなくなる。つまり、王女史に関する情報は、武端→趙子曰と伝えていたかに思わせながら、その実、欧陽→武端→趙子曰という伝達経路が真相であり、武端も操られていたのだ。

欧陽が趙子曰の王女史への「思い」を利用し、自分のたくらみを実行させるというパターンが再登場する。このパターンは、趙子曰が「思い」を断ち切るまで変わることはない。

「張教授がすぐ演説を始める。そしたら、彼の欠点について下に引きずり降ろしてくれ！」
「そんなこと簡単なことさ！」それより、彼女は来るのか来ないのかい！」趙子曰は低い声で慌てて尋ねた。
「来るさ、すぐ来るさ！」 (第十三・2)

趙子曰の頭の中には王女史のことしかなく、趙子曰にとって、張教授を演台から引きずり降ろすことがどんな意味をもつのかなぞ何ら問題とならないのである。

幾つかの場面に渡って、王女史をめぐるストーリーの展開を見てきたが、作品を子細に検

討すると、作者は微妙に変化を付けているものの、一つのパターンがなんども執拗に繰り返されていることが解る^(註9)。

作者はこの繰り返しのによって、読者の、趙子曰が王女史への「思い」から抜け出すことへの期待、王女史にまつわる「謎」が明らかにされることへの期待、この二重の期待を巧妙に繰り返して、焦らし、高めて最後の結末に持って行く。

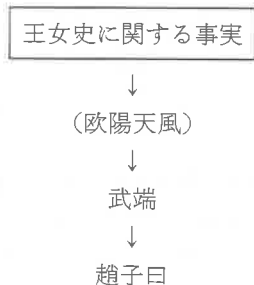
では、作者はこの繰り返しのによって読者に何を暗示しているのか。

確かに、この作品で作者は、各場面で当時の学生運動の弱点、或は当時の女権発展会と象徴的に言われているような団体の持つ欠点を皮肉り、茶化することにより諷刺しているということも出来る。この点が、後に歴史的に見て学生運動、女権発展会等が新しい社会へ移行する原動力であったとする観点から、例えば冒頭に挙げた文学史のように、『趙子曰』が批判される所である。だが、この視点からでは、「秘密」という言葉で送られてきた情報で、作品世界の中を引きずり回され、最後に事実を知った時の衝撃、その後起こる反省は説明できない。

節を改めて更に繰り返しの意味を考えたい。

三

ここでもう一度、作品で繰り返されているパターンを整理すれば、下の図のようになる。



武端の口から「秘密」と称する情報が伝えられ、その情報で趙子曰は踊ることになる。だがその情報たるや、作品が終わってみると真実と

は大きく隔たっていた。何故なら、真実と武端の間に欧陽がおり真実に手を入れ都合よく操作して、武端に「秘密」として流していた。そうすることによって欧陽は趙子曰を操り、趙子曰は踊る。その結果、趙子曰は王女史を苦しめるばかりか、社会に害毒をも流していたのである。

趙子曰が「秘密」を聞いて踊る構図は、ごく普通の人々が新聞等から情報を得る、情報伝達の構図、伝達であるが故に真実が歪曲される可能性があるという事実を連想させないだろうか。

この作品の第二十二、第二十三に於いて、李景純の起こした事件の真相と新聞記事をコントロールさせ、新聞の記事が事実をいかに歪曲しているかを、暴き出そうとしている部分がある。この部分は唐突であたかも作品の流れから無関係にあるような印象を受けるが、趙子曰の繰り広げる「秘密」を巡るストーリーの展開を、情報伝達に対する作者の諷刺と捉えれば、この部分と全体との関わりがはっきり把握出来る。

李景純は軍閥の一人、賀占元という將軍の暗殺を企て実行するが、失敗して牢獄につながれる。李景純投獄の報を聞き、牢に駆け付けてきた趙子曰たちに、暗殺を企てた動機、事件の経過、遺言を述べる下りが第二十二回である。

賀占元は北京に配属されて以後、目抜き通りで、重い罪を起こしたわけでも無い囚人を数人を銃殺しただけでなく、有名な人物を一、二人殺すことで総ての民衆運動を弾圧しようと企てていた。その賀占元の子、賀金山と欧陽とは友人で、欧陽は賀金山を通じて張教授の殺害を働き掛けていた。だから賀占元を暗殺しようとしたのである。だがこの暗殺は、単に張教授を救うためのみならず救国のためでもある、と李景純は述べ、趙子曰たちにはこのような方法でなく別の救国の方法を取るよう勧める。

この事件を、さらに新聞記事の体裁で、第二十三の2で描き、真実と報道の違い、報道の中に入り込む歪曲を指摘している。例えば新聞記事では李景純を「校長排斥運動」の首謀者とし、

また、新聞の名が『真理晩報』としていることから作者の意図がどこにあるか明らかである。

真実と報道の間に何者かが介入し、報道を庶民に流し、その報道を無批判に聞いた人々が踊り始める。この作品の「繰り返し」から考えれば、この点が作者の最も強く指摘したい処ではなかったか。その報道は『真理』という言葉で象徴的に示されるように、できるだけ権威があり、公的であればあるほど人は踊り易い。老舍は誇張して描くが、こっそりと忍びこまれた歪曲は、そう簡単には見抜けない。誰しも趙子曰の道を歩く可能性を持っているのである。

作者がこのテーマに既に関心を持っていたことは、この作品の前に発表された『老張の哲学』に窺うことができる。

王徳は新聞社に務める人物であり、彼の口から新聞報道の虚偽、歪曲が暴かれる。教育次長の乗った車が老婆を轢き殺してしまう現場を見た。そこで真実のとおり記事にしてデスクのところに持って行くと、デスクは、なぜ一台の車が無名の女を撥ねたと書かないのか、と責める。こんなところが新聞社だと王徳は語るのである。（第二十三）

さらに、このテーマは『趙子曰』の次の作の『二馬』に引き継がれている。

『二馬』の舞台はロンドンである。作者は英国人の中国人認識を次のように書く。

東方に旅行する金の無いドイツ人、フランス人、アメリカ人はロンドンにきた時、必ず中国人街を見に来る。小説、日記、新聞の材料を捜すためである。中国人街はなんら変わったところもないし、住んでいる労働者にも、おかしい挙動があるわけではない。つまり、そこに中国人が住んでいるということで、ちょっと見てみようとするのだ。……（略）……中国人街に二十人住んでいたら、必ず五千人とし、しかも、五千人の黄色い顔をした

奴らはアヘンを吸い、武器弾薬を密輸し、人を殺して生首をベッドの下に隠し、老若を問わず婦女を強姦し、一切の、少なくとも極悪非道のことをする連中だ、としてしまう。小説を書き、戯曲を作り、映画を制作する人たちは、中国人を描くのに、この種の伝説と報告を根拠にする。そこで劇や映画を見たり、小説を読んだりする人達は、娘さん、おばあさん、子供から英国皇帝に至るまで、この道理を逸した仕業をしっかりと記憶する。ここにおいて、中国人は世界で最も陰険で、最も汚く、最も厭らしく、最も野卑な、二本足を失った動物に変わる。(第二段・1)

『二馬』では、全体を通じて英国人のこの作られた認識が再三登場し、作品で問題にされている。この認識に、英国に住む中国人は苦しめられるのである。老舎の筆法からすれば、小説、映画、新聞からの情報で踊る英国人は、「秘密」を聞いて踊る趙子曰と同じ存在なのである。

『趙子曰』には、趙子曰は秘密を聞いては、途方もない行動を取るというパターンが作品で繰り返しユーモラスに描かれていた。その中で繰り返されていることから、『趙子曰』という作品は、自分の確固とした考えをもたず、無意識のうちに、情報で踊る人々の諷刺を目的としたものであると考えられる。

では何故、作者は前述のストーリーの展開で作品テーマの主張のために、ユーモラスな表現を必要としたのか。そしてそのユーモラスな表現はどのような効果を上げているのか。更に考えてみたい。

四

この作品の作者、老舎は「談幽默」(ユーモアを語る)で、「ユーモア」について語っている^(註10)。この文章は1935年に書かれたものであるが、この作品の理解に一つの視点を与えてくれる。

ユーモアを持つ人は、スローガンを叫んだり人を罵ったりしないばかりか、他人を物と見ない、自分自身に対しても恥じ入ることもなく、自分を宝もののように見る。彼はいろんな事の中から笑うべき点を見い出せ、技巧的に描き出す。人間の欠点を見い出し、人に見せる。ただ見せるばかりでなく、自分もまた人類の欠点を認める。つまり、人々には笑うべきところがあり、自分もその例外ではない。大局から見れば、寿命はせいぜい百年、だがはかりごとには際限なし、ここに笑うべき根本矛盾がある。ここにおいて、笑いには同情を帯び、ユーモアは深奥に通じる。

老舎の「ユーモア」は常に「同情」をベースにするものであり、人間みな同じ、良いところもあり悪いところもあるという点から生まれ出るものであることが解る。これは老舎の世事や人物を観察するときの基本的態度でもあると言えよう。作者の言う「同情」は、作者が趙子曰に「同情」するという意味にしろ、作者がそのように書き、読者に「同情」が起こるのであれば、作品論から言えば、それは彼の創作方法であるということもできる。わたしはこの創作方法、その結果、出て来たものに注目したいのである。

ではこの作品で、趙子曰に付きまとう「笑い」の根はどこにあるのか。この作品中で幾つか指摘できる。王女史への恋心、自分は世の中でトップの人物であるという自尊心、風流を解する人物であるという自惚れ等々である。この中で今回、趙子曰が王女史に抱く恋心に注目した。

この「笑い」は、男が女性を余りにも強く恋するあまり、とんでもない滑稽な失敗を繰り返してしまうという類いのものである。この類いの「笑い」には、人間が人間として生存して行く限り恐らく永遠に持ち続けるであろう愚かさのようなものが含まれているとも考えられる。そして同時に、この種の「笑い」から、人間だれしも同じであるという同情、ある種の仲間意

識，親近感が生まれてはいないだろうか。

趙子曰が王女史に恋心を抱くことには誰にも反対できないし、王女史を強く慕う余り、正常な判断ができないことも解る。まして彼がその「恋心」を餌に操られている姿たるや同情を引くものがある。ここに、作者の計算があるように思える。つまり、作者はユーモア表現を使い、読者に「憎めなさ」「人の良さ」「無邪気さ」等の感情を引き出し、趙子曰に同情させようとしているのではないか。作者は読者のその同情的感情を利用し、読者に趙子曰を自分の身内と思わせるように仕組んでいるのではないか。

その結果、この作品では、ユーモア表現により、趙子曰はあくまで善人であり悪党ではない、彼の行動はどこまでも無邪気であるという人物像ができあがっている。

確かに、趙子曰の行動は自分の意志、信念、思想によるものではなく、言わば無意識のところで行われており決して罪の意識なぞない。にもかかわらず、作品の結末から見れば、趙子曰はとんでもない悪魔の手助けをしていたのである。

趙子曰が明るく、陽気に踊り回れば回るほど、結末で真相が明らかになった時、趙子曰が受ける衝撃は大きくなる。読者は最初に趙子曰を「憎めない」とか「人が良い」と感じただけ、自分の身内と感じただけ、真実を目の当たりにした時、趙子曰の深い後悔に付き合うことになるのではないか。そして、同時に、自分も趙子曰と同じように、正体不明の人物によって操られ踊らされているのではないかという恐怖に気がつく。そして、最後に、趙子曰に「人が良い」「憎めない」と感じただけ、作者の提起する問題の根深さ、深刻さを思い知らされる。つまり、この作品は、ユーモラスな表現により、趙子曰が陽気に踊り回れば回るほど、読者が趙子曰を身近に感じれば感じるほど、作品テーマの主張の効果は増すのである。

老舍が最も摘発したかったのは、自分の行っている行動が悪いと思わないばかりか、悪いとも気が付かず、いかにも自信ありげに、陽気に

世の中で泳ぎ回っている人物たちなのである。そういう人々が中国の社会に根底に居て、内部から掻き乱しているのである。しかも、それらの人々が善人であるだけになお、始末に終えない。老舍は書かないが、このような摘発の背後に、当時の中国の現状、教育のあり方、社会制度の整備等に対する不満、その改善に対する要求が常に存在しているように感じる。そしてこの摘発が、ロンドンにいる1926年当時の老舍の、中国という祖国に対する愛に基づくものであることは言うまでもない。

この老舍の摘発の方向は既に『老張的哲学』に始まっている^(註11)。

老張の金に対する盲信、趙お婆さんの先祖伝来の考え方に対する信頼、これは趙子曰が恋に狂っているときの姿そのものである。

おわりに

このように作品分析を行って来ると、作品の中に横溢するユーモラスな表現が、作品の成立において極めて重要な作用をしていることが理解出来るのではないか。老舍という作家は、作品で、人間である限り誰もが陥るかもしれない危険な落とし穴を、確かな計算によって、執拗に繰り返し描き出しているのである。だとすれば、この小論の冒頭に挙げた文学史の「ある時には欺き圧迫する者の悪行と被害者の不幸の中から笑いの材料を捜し出し、前者に対する憤慨と、後者に対する同情を笑い声によって薄めてしまい、果ては消し去ってしまう」の、「笑い」が無意味であるばかりか作品を損なっているというが評価がいかにか的を外れであるかが解る。

今回、明らかにしたのは、『趙子曰』の一面であり、もちろん、『趙子曰』が完璧な作品であると言うつもりはない。書いている事が無意味で遊びふうを感じる部分もあるし、なによりも、余りに執拗な繰り返しがかえって作品を損なっているふうにも思える。(繰り返しが執拗すぎて、読者が趙子曰に強く嫌悪を感じるのであれば作

品世界が崩れると思うからである)。ただ、この『趙子曰』には、『老張の哲学』で行おうとした試みが、明らかに脈打っている。確かにテーマ自体には新しさはない。しかし問題の掘り下げ方は確かに老舎のものである。

以後、老舎の作品がさらに、どのような展開を見せているか考えてみたい。(完)

注

- (1) 「光輝工作二十年的老舎先生」(『老舎研究資料』)原載1944年4月17日重慶『新華日報』「新華副刊」
- (2) 『趙子曰』は『小説月報』18巻3号(1927年3月)~18巻11号(同年11月)まで掲載された。ちなみに、『二馬』は、同雑誌20巻5号(1929年5月)~20巻12号(同年12月)まで掲載されている。
- (3) 1949年までの『趙子曰』の単行本としての出版状況は、確認されているもので以下のとおりである。
 <商務印書館>1928年4月初版,11月再版,1929年3版,1932年上海事変で商務印書館が大火に遭った後,1933年2月1版,1935年5月2版,1943年再版,1947年2月4版,
 <上海・晨光>1948年1月初版,11月再版,1949年4月3版,
 (『老舎研究資料編目』北京市図書館学会・1983年)
 これからも、『趙子曰』がどれほど読まれていたかが推測出来るのではないか。
 また、『趙子曰』が掲載される2ヶ月前の『小説月報』18巻1号(1927年1月)で、「最後一頁」に編者は『趙子曰』に関して次のように書いている。『『趙子曰』の作者は、『老張の哲学』を書いた老舎君である。こんどの『趙子曰』は『老張の哲学』に較べると更に進歩している。書いているのは、教員閑民ではなく、学生達であり、普段に出合い、いつも付き合っている者たちである。老舎君は軽妙な筆で、北京のアパート生活を描き、真に迫るものがある。『趙子曰』の数人の個性は、我々読者の面前に浮かぶ。後半部はむしろ戯曲は叙述に入っており、前半部のユーモアはもうない。だが、同様に生き生きとしている。かつ、一人の偉大な犠牲者の故事で作品を結んでおり、これは我々を限りない感嘆へと導くものである。この作品は、始めは笑わせ、やがて感動させ、終わりに悲憤させる。』発表以前にこの作品を読んだであろう編者は、このように感動を述べている。このときの編者は、恐らく鄭振鐸であろうが、この感動からも、読者にどれほど受け入れられたかの一端を窺うことが出来るだろう。
- (4) 『中国現代文学史簡編』唐弢主編・人民文学出版社
- (5) 「老舎『老張の哲学』私論」『集刊東洋学』57号(1987・5)
- (6) この傾向は『老張の哲学』に既に見えるものである。(同上論文参照)
- (7) 老舎は王女史の描写について次のように語っている。「この本の中にただ一人の女性の登場人物があり、終始顔を出さない。私は女性を描くのが怖い。ふだん女性に会っていてもいつもどこか不快感を感じる。私が学生だったころ、まだ男女共学ではなかった。仕事をするころは、終日中年の人と一緒にいたから、自然と落ち着きを装うことになった。私は女性と付き合う機会がなかったが、これもいわば栄光のようなものである。後の作品に女性の登場人物はいるが、ほとんど皆想像の中から出て来たもので、それに私が見た女性の挙動や容貌を付け加えた。女性は本当にこんなふうなのか尋ねられれば、ウソをつかないかぎり、頭を横に振らざるをえない。『趙子曰』に女性が出て来ないのは、私の最も誠実なところである」(我怎么写『趙子曰』・老舎研究資料)
- (8) この作品では「秘密」という言葉の存在は大きい。「秘密」という言葉は、「你怎么着(どうおもう)」という言葉と共に、情報通の武端の口癖という設定である。この作品では、おおよそ「秘密」が69回使われ、「你怎么着」は45回使われている。「你怎么着」は「武端は息を継ぐたびにいつも『你怎么着』を用い、常に人に裏に取って口を挟めない秘密があるように思わせる」(第十二・3)という点からも「秘密」と同類の言葉と捉えることができる。「秘密」という言葉は、極めて暗示的、刺激的で、読者にあらゆるケースを連想させ、推理させる。ここに、あたかも推理小説のような効果を狙うという作者の意図も窺うことができる。
- (9) 効果的な「繰返し」は1936年に書かれた老舎の代表作『駱駝祥子』にもみられる。
- (10) 『老舎研究資料』より訳出した。これはもともと「宇宙風」第23期(1936・8・16)に掲載され、後に創作体験談集『老牛破車』に入れられた。
- (11) (5)を参照
- (付記) この小論の「一」までは「あらすじ」を加え「研究会誌」第13号に掲載した。そこに続けて後半を掲載するつもりであったが、「会誌」が休刊になったので、少し手を入れ、この「紀要」に全文を載せることにした。